

第百六十八號 (第十五卷)

(昭和十年) 四月 號

天文家の見かた

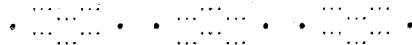
(巻 頭 言)

昨年末から佛教家の一部に於いて“指方立相”といふ興味ある問題についての論が、やかましく論ぜられてゐる。之れは空や無に關する佛教々理を教示するために、七八百年前から唱へ始められた説であつて、つまり佛教上の理想郷たる淨土なるものが、十萬億土の西に存在するといふ教へである。果して此うした淨土や極樂境が實在するものであるか？ 殊に又其れが西方に偏在してゐるものであるか？ 實に、今の吾々の判斷力を以つてすれば、奇々妙々なる説であるやうにも思はれるので、佛教徒以外の人々は、多くは之れを一笑に附し去るかも知れないが、しかし自分は思ふに、之れには頗る暗示深い意味がある。決して、今のモダンな佛教々師さへ之れに易々と反逆し得るやうな軽いものではないのである。先づ吾々は、問題を、現代人のみのために現代人が解説するといふ狭い見地を枯く止めて、抑も此の教説が發明された其の時代と人とを考へて見ねばならない。今より七八百年前と言へば、西洋に於いてさへ地球が圓いといふことが如何ほどまで信じられてゐたか分らない時代である。況んや、東洋方面では、誰一人此の世界を平坦なものとする以外の思想を持つてゐなかつた。しかるに、晴れた夜な夜な星空を仰ぐと、あらゆる星辰は誠に神祕な光りのさゝやきを投げかけつゝ、西へ西へと永久のマーチを續けてゐる事實が誰の眼にも容易に看取されるのであるから、唯、理屈なしに、空を見ることによつてのみでも、「宇宙は四方八方が皆平等なもの」ではなく、總べての天體が奇しくも導かれ行く「西方」こそ、まことに何となく奥ゆかしい神祕の國であるやうに考へるのは、人の心の自然であらう。日夜をわかつたず流れ行く星々の、行く先きである「西方」こそは、我々人類も亦、終には歸り行く運命に置かれてゐるのではあるまいか！ と考へる者こ

そ、實に思想ある人の考へ方ではある。『東』も不思議ではあるが、人心のセンチメンタリズムから言へば、未來をあてがれる人にとつては、『西方』こそ、こよなく神祕の境地と觀ぜられる。従つて、佛教のやうな深い哲理の先驅者たちが、單に室内で默想に耽るに止まらず、戸外にあつて天地の自然を見、宇宙の動きを觀じたとき、淨土を『西方』にと考へたのは決して無理からぬことであるといはなければならない。此の事實を直視しないで、只、机上の空論を戦はす人々こそ、誠に救ひ難き輩と言はねばならない。

基督教理の中にも亦、天文學の豫備知識なくては解き得ない謎が澤山ある。其の一例を、かの、新約全書の末尾にある『ヨハネの默示録』に見る。默示録は、實に謎の書であると、多くの人は言ふ。まことに其の通り、此の書を完全に解き得る人は、少くとも初代基督教理の奥殿を極めた人と言つて好いであらう。しかし、こゝにも、吾々天文家の立場から見れば、やはり若干の解決の鍵があるのであつて、些々たる獨斷に陥らず、實に正々堂々と、この神祕不可思議な一書の心を探ることが出来るのである。

天文の分野は廣い。世には只、天文が歴時や經緯度の觀測決定に役立つのみで、殆んど之れ以外、人世に直接關係なきものと思ひ込んでゐる人が多いやうであるが、實に、以つての外のことである。今日のあらゆる天然理學(Natural Sciences)の取り扱ふ諸現象から、人心の精神理學や、宗教、藝術等々に至るまで、天文なしには意味を失ふ重大事が實に夥しい。之れ等の諸點を研究解明し、世を導き教へるだけの氣魄を吾人は常々養つて置かねばならない。(山本)



爾の時、佛長老舍利弗に告げたまはく、是れより西方十萬億土の佛土を過ぎて世界あり、名づけて極樂といふ。其の土に佛まします、阿彌陀と號づけてたてまつる。いま現に在しまして說法したまへり。(佛說阿彌陀經)